

社内一貫の生産システムをさらに磨き 目指すはハイクオリティ製品づくり



おじゃまします

さかき新企業人インタビュー②①

オリオンワイヤリング株式会社 代表取締役社長

こばやし あつし
小林 厚視さん



社長に就任したのは昨年9月。この春には社名を児玉製作所からオリオンワイヤリングに変更するとともに新社屋が完成、創業53年にして新たなスタートを切った。社内一貫生産システムを武器にリーマンショック後も堅実に業績を伸ばす小林厚視社長にお聞きした。

—— 御社の歴史をお聞かせください。

旧社名は児玉製作所で昭和35年の創業です。創業当初から測量機器や厨房関連機器、制御装置などの各種産業用機械の設計・製造を行っていました。

—— 社長ご自身の経歴は？

昭和20年3月生まれの68歳。須崎市出身。オリオン機械(本社・須崎市)から平成6年に取締役工場長として旧児玉製作所に出向。以後、経営の建て直しに尽力。伝統の社内一貫生産体制をさらに強化し、フレキシブルな生産システムを最大限に活かすことでリーマンショックも乗り切った。急逝した児玉社長の後を継いで代表取締役就任したのは昨年9月。現在は長野市内で奥様とふたり暮らし。モットーは「企業が存続する目的は社会貢献」。「かつて『世界の坂城』と呼ばれたように、もう一度町や商工会が窓口となって『坂城ブランド』の復権を目指していきたいですね」と結んだ。

児玉製作所の主要な取引会

社のひとつである須坂市のオリオン機械から、経営支援のため取締役工場長として平成6年に出向してきました。当時、児玉製作所の受注に占めるオリオン機械の割合は約25%ほどでした。経営を立て直すだけなら出向元からの受注を多くすればいいわけですが、私は逆にそうした下請け的な経営からの脱却を訴えま

した。もともと社内での一貫生産を特徴にしてきた会社でしたが、その力を出し切れず、量産型の下請けに終始していたのです。下請けに頼らず自分たちの強みである一貫生産の部分強化し、提案型の受

注生産にシフトしよう、と取り組みました。

—— もともとあった高い技術力をブラッシュアップ？

特別な設備があるとか、他社より技術力が優れている、というよりも、製品の設計から板金加工、溶接・塗装、配線・組立にいたるすべての製造工程を社内で一貫して手がける一貫生産であれば、お客様のニーズにより細やかに対応できます。それに、短納期が可能になり、コスト削減にもつながります。それぞれの部門の技術を高めると同時に、それらを連動する総合力でお客様のニーズにお応えする、という体制です。

—— リーマンショックの影響は？

当社も他社同様に、リーマンショック後は厳しい状況がありました。しかし、我々の社内一貫生産システムが評価されたのもこの時期だったのかもしれない。当社のシステムが納期の短縮につながることからお客様のニーズにお応えすることができ、持ちこ

たえることができました。—— 今後の展望・抱負をお聞かせください。

これまでは、どちらかといえば半導体や液晶関連の受注が多かったのですが、どうしても為替の変動等に左右されやすい側面がありました。今後は、安定性の高い食品や医療関連の分野にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。また、一貫生産システムでは、企画提案力を向上させ、お客様にとってより付加価値の高い製品づくりを目指していきたいと思っています。

